東京納税貯蓄組合総連合会　会長賞

「税に支えられて」

足立区立 第十一中学校

三年　黒田　恵介

今年の夏休み、私は東京ビックサイトで開催された下水道展へ行った。きっかけは二〇二五年に起こった八潮道路陥没事故だ。下水道管の中で発生した硫化水素によって下水道管が削られ、地面の下に大きな空洞ができてしまったためその空洞が、走っていく車の重圧に耐えられなくなり道路が陥没した。トラックが転落する様子を見て、私は強いショックを受けた。

この事故をきっかけに、日本の下水道がどのように作られ、維持されてきたのかを考えるようになった。調べて見ると、下水道はすべて私たちの税によって作られ、全国に普及してきた。もしも税金による下水道事業が進んでいなかったら、私たちは安全かつ清潔な街で暮らすことができなかったはずだ。感染症が流行したり、少量の雨でも街が水浸しになったりしていたかもしれない。私が毎日、何不自由なく安全に暮らせているのは、税金によって支えられた下水道事業のおかげなのだと実感した。

しかし現在、日本の下水道は大きな岐路に立たされている。日本は一九七〇年頃から、下水道を全国に広げるための建設工事ばかりに大きな予算を投じてきた。その結果、普及率は上がったものの、今度はそれらの下水管が同時に寿命を迎えるという老朽化の問題に直面している。地面の下にある目に見えない下水道管をどのようにして守っていくかが今、国や自治体の課題になってい

るのだ。

私が訪れた下水道展には、四百十七社もの企業が出展していた。会場には最新の技術があった。危険な下水道管の中を飛び回って点検するドローン、暗い管内を進んでいくロボット、道路を走りながら搭載されたカメラで地面の下の空洞を見つけ出す特殊な車の概要が展示されていた。宇宙から地面の下を解析して可視化する、ＪＡＸＡ認定のベンチャー企業まであった。老朽化という問題は、たくさんの企業が知恵を絞って新しい装置やシステムを開発し、自治体と共に正しく税金を使って取り組んでいかなければ解決できない。もし、下水道のメンテナンスに税金が使われなくなってしまったら、日本中のあちこちの道路で同じような陥没事故が起き、私たちの日常は一瞬で壊れてしまうだろう。だからこそ税金はただ国に集められるだけのものではなく、私たちの未来の安全を守るための、社会全体での大切な投資なのだと思う。今を生きる私たちが税金の役割を正しく理解し、人ごとではなく自分たちの問題として税金で生活を支えていく必要があると感じた。

私は、将来ものづくりの仕事に携わりたい。下水道展で社会を支える技術に触れたことでその気持ちは更に強くなった。将来この問題を解決するような新しい技術の開発に関わり、社会の役に立ちたい。そして、社会人になったら、今度は自分がしっかりと納税し、次の世代の安全な暮らしを支える側になりたい。